

本書は、私の〈幸福否定〉という考えかたについて、特に人間の「自発性」という重要な要素を中心に、昨今よく耳にする話題を題材にとって、具体的に解説することを目的に書かれたものです。本書は、2年ほど前にいちおうの完成をみたのですが、この出版不況のため、出版社がなかなか決まりません。いつまでも放置しておくことはできないので、とりあえず電子版という形で、公開に踏み切ることになりました。

本書は、「人間の精神病理学」と銘打っていますが、それは、これまでの精神病理学が人間の生きた心を扱っていないという批判を込めたためです。人間は、生物の中で最も進化を遂げた動物なので、その心は動物のレベルをはるかに超えた特殊性を持っています。動物ですら機械的に生活しているわけではありませんから、ましてや人間が、たとえば“快樂原則”などという、単純きわまりない絵空ごとの原理に従って生きているはずはありません。

本書は、全体が3部構成になっています。本書には、「生活圏」、「芸術圏」という言

葉が時おり出てきますが、それは、昭和初期の詩人・中原中也の言葉を借用したものです。本書で言うところの「生活圏」的現象とは、要するに動物的レベルで起こる現象を指しているのに対して、「芸術圏」的現象は、人間特有の現象を指して使われています。芸術圏で起こる現象を扱った第1部では、日常生活の中で多くの人たちが自ら体験したり耳にしたりする、ごくありふれた現象を俎上に載せています。自発性が要求されるこうした現象は、およそ動物にはありそうにない、まさに人間特有の問題と言えるでしょう。

第2部は、心因性疾患の原因をどのようにして探り出すのかを、8例の事例を題材にして、きわめて操作的、具体的に説明しています。ここでは、客観的基準を使って心理的原因を絞り込んでゆく過程を、興味深く読んでいただけることと思います。一般の心理療法やその理論では、明確に切り取れる心理的原因が、症状出現の直前にあるとは考えられていませんが、そればかりではありません。心理的原因というもの

が、このように操作的かつ客観的に探り出せるとは、今なお夢想すらされていないわけです。こうした方法論は、私の心理療法の恩師である小坂英世先生の創見になるのですが、この革命的方法論がなかったら、現在の私の考えかたが生まれなかったのはまちがいありません。

第3部は、人間のいわば動物的側面に発生する現象を扱ったものです。類人猿などのいわゆる高等動物にはその萌芽が見られるようですが、ここでは、主として肉親間の愛情（の否定）に起因するさまざまな現象を取りあげています。動物的側面で起こる問題とはいえ、やはり人間特有の特徴を備えていることがわかりいただけるでしょう。この方面からの検討を通じて、人間はいかに動物と違うかが、あらためて明らかになるはずです。

本書は、複雑な経過を辿ってきたおかげで、4社の出版社の編集者を含め、総計6名の編集者に目を通してもらっています。このCD-ROMに収録された最終稿は、そのうちの3名の意見を容れて修正された

ものです。もともとは400ページを優に越える本だったのですが、ひとりの編集者の示唆により、贅肉をできるかぎりそぎ落とし、目次と索引を含めて350ページほどに絞り込みました。いつもは索引を作るのですが、冊子版と違って検索が容易なため、今回はあえて作成しませんでした。

このCD-ROMは、Windowsなら最新バージョンでも、ドライブに入れるだけで自動的に立ち上がるようになっていますが、もしうまく立ち上がらないようでしたら、ルート・ディレクトリにあるpsychopathologyofman.htmlというファイルをダブルクリックしてください。

なお、ファイルの形式は高品質の.pdfですので、画面で大きさを調節して読むこともできますが、印刷して読むのであれば、B5版に2ページ分を見開き印刷すると、ちょうどよい大きさになります。

2008年12月29日

心の研究室

笠原敏雄